③ サッカー振興における横浜サッカー協会の歴史と役割

■藤木隆明

1—プレーヤーのためにある協会
2—東京オリンピックで普及促進
3—生活に密着したスポーツは「文化」
4—Jリーグ百年構想
5—ワールドカップ開催にふさわしい環境整備
6—市民のためのスポーツ

1—プレーヤーのためにある協会

一九三二年（昭和七年）に中学生（旧制）の蹴球大会を運営する必要上、横浜蹴球連盟が誕生した。当時のサッカーは、師範学校をルーツとして旧制中学校に広まったが、横浜二中（現翠嵐高校）ほか僅かな中学校でしか取り入れられていなかった。その二年前に設立した神奈川県蹴球連盟も、横浜の数校に湘南中学、小田原中学等を加えた中学校主体の組織であった。それ以来サッカー協会と名を変えた現在まで、協会の事業目的はサッカーをプレーする人たちのお役に立ちたいということに尽きる。社団法人横浜サッカー協会定款第三条には、「この法人は、横浜市においてサッカーの普及発展、競技力の向上に関する事業を行い、もって横浜市民の豊かなスポーツ文化の振興及び心身の健全な発達に寄与することを目的とする。」とある。

一九七二年に施行された任意団体当時の規約では、「横浜市におけるサッカー競技の発展向上及び加盟団体の親睦を図ることを目的とする」とあり、プレーヤーのための組織だったことは明白である。

確かに連盟設立当初は、教育の場での体育として中学校及び横浜高等工業学校（現横浜国立大学）、横浜市立横浜商業専門学校（現横浜市立大学）のほか、三菱造船所のような大企業でしかサッカーをプレーするものはいなかった。

しかし、暗い時代が去ったあとは当時の平沼亮三市長のスポーツに対する理解もあって市民大会や五大都市大会が始まり、サッカーは教育の場から社会へと進出していった。

とはいえ、所詮サッカーはマイナーの域を超えず、一般市民には無縁の時代が続いた。市民大会も、一九六三年（昭和三十八年）には、古河電工、日産自動車、日立横浜、日立戸塚、相鉄、森永製菓、神奈川トヨタの他高校OB、大学で二十一チーム、高校が十チームに過ぎなかったから、保土ヶ谷と三ツ沢で十分日程をまかなうことが可能だった。

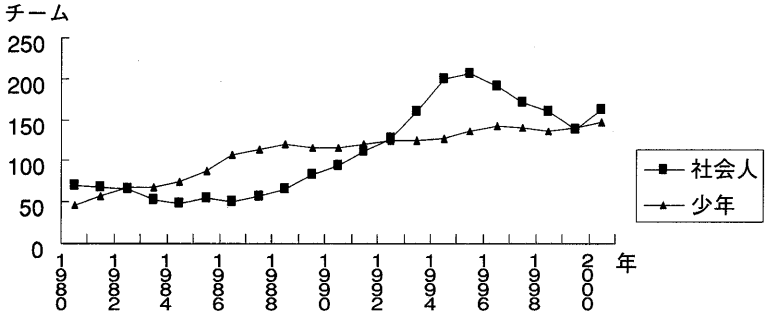
2—東京オリンピックで普及促進

一九六四年（昭和三十九年）に東京オリンピックのサッカーが三ツ沢球技場を全面改修して開催されることになり、一躍脚光を浴びることになる。サッカーというスポーツの啓蒙のため、協会が協力して横浜市教育委員会の巡回指導が行われ、ゴムのサッカーボールが小学校に配られ、小学校にサッカーゴールが設置された。片岡次夫氏（社団法人横浜サッカー協会顧問）がスポーツ少年団として第一回横浜国際チビッ子サッカー大会を始めたのが一九六九年。セントジョセフ、神奈川朝鮮初級学校のほか市内の少年サッカーは四チームに過ぎなかったが、その後「紅き血のイレブン」、「キャプテン翼」に触発されて、二十回大会は百二十チームとなった。一度ボールを蹴った者がサッカーの虜になるのは必定である。彼らが長じて社会人となった今、大人のチームは一時は二百チームを超え、協会はグラウンド不足のため彼らがサッカーをエンジョイするに足る機会提供の義務を果たすことができなくなった。そのためここ数年登録チーム数は減少傾向にある。今年の登録チームは、社会人百六十三、少年百四十七、ジュニアユース十六、シニア十七、少女を含めて女子が十四である。

少年の場合、八歳、十歳、十二歳の学年別に行われ、春秋各千二百試合を消化する。主に学校開放を利用して実施するが、高学年に適する八十m×五十mのコートが取れる小学校は市内にまずない。

社会人は、トーナメントの市民大会と、七チームごとのリーグ戦を定例化しているが、平成十二年度の施設調整会議で協会が社会人

図—1　横浜サッカー協会登録チーム数20年間の推移



登録チーム数

年	社会人	少年
1980	70	45
1981	69	57
1982	65	67
1983	53	67
1984	49	75
1985	55	88
1986	50	108
1987	56	114
1988	65	120
1989	83	116
1990	94	116
1991	111	120
1992	128	125
1993	161	125
1994	199	127
1995	207	136
1996	191	143
1997	172	141
1998	159	136
1999	139	141
2000	163	147

向けに割り当てられたグラウンドは百七十七時間。県下各郡市協会持ち回りの行事や五大都市大会の選考会分を除くと、試合数にして百試合にしかならない。これだけでは高秀市長を大会会長と仰ぐ市民大会も年度内に遂行することは完全に不可能である。市民リーグの四百五十試合に至っては、全くのお手上げだから、登録チームにグラウンドは自分たちで探してくださいという有様が何年も続いている。

3 生活に密着したスポーツは「文化」

一九九三年のJリーグ開幕を前にして、協会は三ツ沢球技場を管理する横浜市緑政局と球団との間に立ち、使用の許可申請、使用料の支払い、日程調整等に関わり、その責任の重大性故に任意団体であることが問題視された。チームから運営を受託することによる収益性からも法人化は避けられなかった。もう一つ、協会組織の強化、事業内容の充実とともに、横浜市民の豊かなスポーツ文化の振興が、公益法人としての命題に挙げられた。

Jリーグは、その理念の一つとして「スポーツ文化」としてのサッカーの振興をあげている。文化とはいったい何なのか。スポーツは文化たりうるのか。

辞書によれば、文化とは①CULTUREの訳語であり、a自然に働きかけて人類の生活に役立たせる努力。b学問、芸術、宗教などの人間の精神活動の産物―とある。これでは、スポーツと文化の係わり合いは判然としない。ただ、CULTUREの語源が、「耕作」であることに思い当たる節がある。古代の人たちは、大地を耕し、種を播き、時間をかけて自然の恵みを享受し、その結果収穫を得て日々の生活を豊かにした。それが「文化」というものであれば、日常のスポーツ活動は立派な文化と言えないか。

東京オリンピック以後、各地に沸き立つようにおこった少年サッカークラブは、土曜日曜ごとに学校開放を利用して活動を続け、親も取り込んでコミュニティを形成している。ただサッカーが楽しいからという理由で大人も子供もサッカーで汗を流す。それによって地域の人の輪ができ、何らかの充足感を得る。それがCULTUREであり、文化ではないのか。しかし、その子供たちが大人になったとき、ヨコハマがサッカー不毛の地であることを如実に思い知らされることになる。

4 Jリーグ百年構想

人々が集うのがクラブ。共通の趣味があればなおすばらしい。

Jリーグの川淵チェアマンが、昔訪れたドイツのスポーツシューレを念頭に、百年構想（調査季報129号参照）に掲げたようなクラブは現在の日本でなかなか望むべくもない。

JR山手駅近くの高台に、ヨコハマカントリー&アスレチッククラブ（YC&AC）という外国人クラブがある。このクラブは、神戸と並んで日本で最初にサッカーを始めたと言われている。横浜開港時のクリケットクラブに端を発し、一八八四年に他の種目のクラブを統合した。関東大震災後現在の矢口台に移り、ダイビング可能なプールのほか、芝生のグラウンドでのサッカー、ラグビー、ホッケー、クリケットがシーズン制で行われている。アウトドアではほかにテニス、ローンボウルの専用コートがある。インドアではバドミントン、バスケットボールが体育館、ボウリング、スカッシュのコートが別にある。食堂やバーはもちろんのこと。

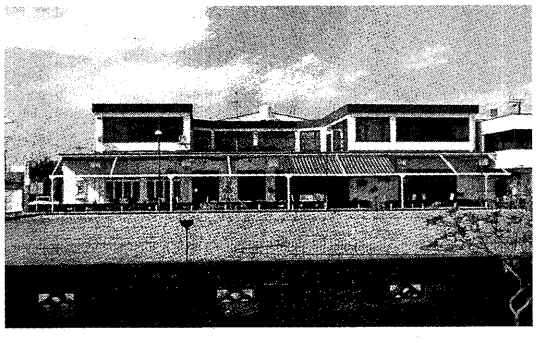
横浜サッカー協会は、十月～三月のウインターシーズンに行われるサッカーを通じて昔から交流があり、典型的なヨーロッパクラブの息吹に触れてきたが、こうしたクラブは日本の現状では「百年構想」である。

ヨーロッパでは、スポーツは人々の生活の中に溶け込んでいる。特にドイツでは大都会はもちろんどんな小さな町にもクラブがあり、とりわけ若い人たちの交流の場となっている。医療より保健を重視しているドイツでは、ゴールデンプランに基づいて国家がクラブに経済的支援を惜しまない。

5 ワールドカップ開催にふさわしい環境整備

ヨーロッパ型クラブは言うに及ばず、サッカーを市民のスポーツとすることすらないがしろにされているようなわれわれにとって、現在渇望してやまないのは、ひたすらサッカーができるグラウンドである。僅か十年ばかりの間に急成長したサッカーに、十分なグラウンドをというのもはなはだおこがましいが、二〇〇二年にワールドカップの決勝を行おうとする街で、サッカーをしたくてしょう

ヨコハマカントリー＆アスレチッククラブ（YC&AC）のグラウンド風景



表―平成12年度屋外体育施設優先利用状況

グラウンド	横浜サッカー協会と各区サッカー協会、横浜市ラグビー・フットボール協会、福祉団体優先利用日数	横浜サッカー協会割当て日数	内訳 社会人割当て日数	少年割当て日数	シニア割当て日数
三ツ沢公園（陸上）	8	3	1		2
三ツ沢公園（補助）少年用	12	1.5		1.5	
小机競技場	27	6	4		2
常磐公園	33	16	12.5	3.5	
本牧市民公園	26	11	5.5		5.5
今川公園草地広場	8	0			
長浜公園（少年用）	27	6.5		6.5	
小雀公園（少年用）	27	0			
清水が丘（少年用）	6	0			
東俣野（少年用）	6	3		3	
合計	180	47	23	14.5	9.5

優先利用日数とは、横浜サッカー協会、横浜市ラグビー・フットボール協会、各区サッカー協会、福祉団体が主管する市民を対象とした大会のために利用可能な日数のことを言う。

がない若者たちが暇をもてあましているというのは、全く釈然としない。

ワールドカップ決勝戦を横浜国際総合競技場で行いました。ヨコハマの名がメディアの波に乗って世界中に喧伝されました。世界各国から訪れた大勢の観客が横浜の街に溢れ、それなりの経済効果がありました。しかし、市民のサッカー熱は一時盛り上がったもののプレーグラウンドの貧困のままやり場のないむなしさに、槿花一朝の夢に終わりました…。そんなことになってもいいのだろうか。

ことグラウンドに関して、残念ながら横浜サッカー協会が自前で一万平方メートルの土地を調達するのは百年経っても不可能である。市内各地にサッカー場を含めた運動公園の整備が進められているが、ワールドカップを契機として、なお一層のご理解を頂きたい。周辺地域の協力を得て、学校開放を拡充し、夜間照明をつけて活用し、スポーツコミュニティの核とする。また、景気後退による遊休地があれば借り上げて整備し、サッカーグラウンドに利用するのも一案である。

東京オリンピック以後の少年サッカーの隆盛は、校庭開放に負うところが多い。それが波及して現在の競技人口の拡大となり、Jリーグを生み、ワールドカップフランス大会出場の足掛かりとなった。二〇〇二年ワールドカップ開催が、サッカーの認識を高め、文化としてのサッカーが地域の人々の生活の一部になるような施策を講じてほしい。百年構想は、短期間に欧州スタイルのクラブ組織に集約されることを望んでいない。欧州や南米のようにサッカーが生活の一部になっていない日本では、こうした草の根運動が必要だろう。

6 市民のためのスポーツ

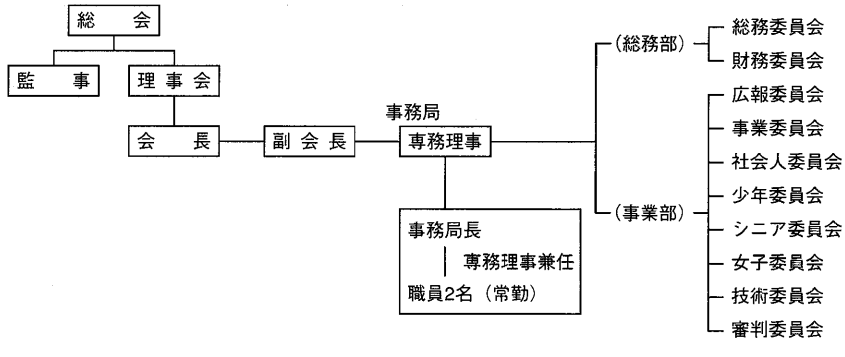
(財)日本サッカー協会は、日本サッカー界を統括し代表する団体であり、その傘下に四十七都道府県の協会がある。普及振興、競技力の向上を目的として競技会を主催し、エリートの養成に努め、日本サッカーのレベルアップを図っている。

日本のサッカーは、他のスポーツと同様に学校体育の中で育ち、企業の支援を得てエリートを育ててきた。プレーヤーがひとたび社会に出るや、エリートから外れた大方のプレーヤーは学校のOBクラブか、企業内の同好会でプレーを続け、地域で活動するということは殆どなかった。

しかし、サッカーの普及が進み底辺が広がった今、世の中の移り変わりに伴ってチームの在り方も変化してきている。つまり、日常の生活の中で個人が主体的にサッカーを「する＝楽しむ」という風潮が生まれてきた。各々のライフスタイルに合わせ、生活する地域でスポーツを楽しむという意識や習慣が増し、チームが地域コミュニティの一角を形成するようになった。横浜サッカー協会は、五大都市大会や県の郡市大会、県少年選抜大会に代表チームを送ることはあるが、とりたててそのためにエリートを養成することを目的とはしていない。

協会の役割は、あくまで市民が生活の中に組み込んだ「楽しむサッカー」のお手伝いをすることにある。少年サッカーに対しては、指導することも協会事業の一つであるが、他のチームとの交流を通してサッカーの楽しさを肌で感じてもらえればそれで良しとしている。中学校、高校チームは、登録費の関係で一団体として登録した中学校体育連盟、高等学校体育連盟にすべて任せてあるのが実情だ。問題は社会人とシニアのチームだ。成人にとってサッカーは、地域において職業とは別次元の人とのつながりをもたらす。サッカーは既に生活の一部になっている。「する」場所の確保こそ、横浜サッカー協会に与えられた仕事である。経済至上主義は、戦後の荒廃から脱却するためやむをえなかったかもしれない。そして情報化時代を迎えIT革命に狂奔する現代、ともすると個としての人間と人間の係わり合いが希薄になりかねない。現代の世相がそれを象徴している。豊かな人間性の回復のために、無償の行為としてスポーツを「する」ことの意義は大きい。サッカーは人と人とのふれあいを通して心を癒してくれるからこそ、世界中の人に愛されている。

市民による、市民のための、市民のスポーツ。それが二十一世紀横浜市民のサッカーのあり方であろう。

<社団法人横浜サッカー協会専務理事>

図―2 社団法人横浜サッカー協会組織図